お前だけ

snowman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前だけ

【Ｎコード】

Ｎ５８２４Ｃ

【作者名】

ｓｎｏｗｍａｎ

【あらすじ】

俺だけのものにしたかった。だけど俺はお前だけのものにはなれない。そんな俺は、お前に何一つ伝えることが出来ない。（「私だけ」と対になっているお話です）

1ページ目

なんで俺たちは出会ってしまったんだろうな。

結ばれないことは決まっていたのに。

この歳になって、初恋のように恋焦がれるなんて。

しかもあんな小娘相手に。

始めて会った時のことは今でもしっかりと覚えている。
俺はコックで、雇われシェフだけど自分の店を持っていた。
それに加えて趣味のバイクの維持費のために、昔のつてでバイトをしていた。
金曜日の夜だけ、夜の9時から閉店の朝3時まで。
昔働いていた会社の店で、自分もチーフをしていたため勝手は分かっていた。
そこに現れた。
男だらけの職場にポトリと落とされたように。

4月に入ってきた新入社員。
色が白くて背がスラリと高い、ホワッとした娘。
『中里みのり』
その初出社に出くわしたのだ。
忙しかったために、ちゃんとした挨拶も出来ないままにその日は終わってしまった。

チーフは女ということで、深夜営業には残さなかったからだ。
正直あまり期待はしていなかった。
専門学校を出たからと言っても頭でっかちで使えない奴が多いし、
しかも見た目から男の中で我慢は出来ないと思った。

そして次の金曜日に改めて挨拶を交わした。
内気そうに見えたそいつは、ビックリするほどサバサバとしていて
クシャっと笑う笑顔に何か掴まれた気がした。
女臭さを感じないのに、その存在からは愛らしさが滲み出ていた。
一緒に仕事をしてみれば、とても真面目で「はい！」という返事が
気持ちいい。
気付けば、何かと気にかけていた。
元気が無ければ、ちょっかいを出して笑わせたりしていた。

でも俺はただ、アイツの笑顔が見たいだけだったのかもしれない。

構っていると、みのりはすぐに心を開いて懐いてきた。
金曜日俺が行けば、すぐに笑顔で迎えてくれて一緒に仕事を始めた。
まわりを寄せ付けないほど、俺とアイツは二人で居た。
そんな俺たちをチーフが快く思うわけが無かった。
上司であるチーフよりも、金曜日だけ現れるバイトの俺を信頼して
尊敬する。
それでも俺はこの立場から退く気は無かった。
みのりの一番の理解者であり、此処で唯一心を許す相手を誰かに譲
るつもりは無い。
それは兄が妹を思うような感覚なのか・・・
深く考えることはしなかった。

2ページ目

その日は次の日に予定が入っていたためにバイクで行かなければならなかった。
金曜は終電が終わってしまうため他のスタッフ全員、始発まで店で飲むことになっている。
そんな中、始発前にみのりを残して帰るのは正直心配だった。
だから俺はヘルメットをもう一つ持って行くことにした。
帰り道の途中に住んでいたみのりを後ろに乗せて帰ろうと決めていた。

金曜日仕事を終え、皆のツマミを二人で作り
「今日は俺、もう帰らねぇといけねぇんだわ。」
と伝えると、一気に不安そうな淋しそうな顔をして
「高井さん帰っちゃうんですか…」
泣き出しそうなくらいの顔。
「今日はバイクで来てるんだ。お前の分のメットも持ってきたから」
そう言うと、一気に嬉しそうな顔になり
「乗っけて帰ってくれるんですか！」
とハシャギだした。
『あぁ・・。可愛いなぁ』
そう思えば思うほど、胸の辺りが苦しくなった。
ヘルメットの被り方が分からないらしいみのりに、俺が被せてやり頭をポンッと叩いた。
フニャっと笑う。
俺を心底信頼して向ける笑顔が、また胸を締め付ける。

とっくに気付いていた。

俺はみのりのことが好きだ。
中学生みたいに、笑顔を見ただけで胸が潰れてしまいそうな感覚。
３５にもなってバカみたいな気持ち。
それでもこんな感情は捨てる他無かった。
俺は嫁も子供も居る身。
みのりはまだ男と付き合ったことがない程、純粋な娘。
そんなアイツを俺が汚して言い訳が無い。
自分の中にこんなプラトニックな部分が残っていたなんて恥ずかしいくらいに、みのりは大切な存在だった。

アイツも俺に想いを寄せていることは知っていた。
ズルイ俺は、このままずっと結ばれはしなくともこの関係のまま想い合っていけたら良いのにと思っていた。
それはみのりの未来を潰すことになるのに。
だからだ。
どうせなら嫌われてしまったらどんなに楽か・・・
自分が昔不倫をしていた話をした。
普通に聞いているフリをしているアイツを直接見ることも出来ずに、俺はただぺらぺらと前の彼女との話をし続けた。
それでも、変わりなく接してくるみのり。

このまま・・・俺はどんなに汚れようと、アイツの隣に居たいと願った。

そんな汚い願いも虚しく崩れ落ちる。
みのりが急に他の店に移動することになったのだ。
最低１年以上はこのまま一緒に居られると思っていた。

そして崩れは止まらない。

俺は事故に合った。
もう何回も無かったみのりとの時間を失い、バイクも失った。
天罰だと思った。
入院は2週間以上になるそうだった。

今一人で不安と戦っているであろうアイツが、心配で心配で堪らなかった。
自分の怪我などどうでも良かった。
カミさんや親からこっ酷く叱られ、バイクにはもう乗るなとまで言われた。

入院して一週間、トイレから病室まで戻ろうとしていた廊下の反対側からみのりが歩いてきた。
驚きを隠せずに口を開く
「どうしたんだよ・・・」
そんな言葉しか出てこなかった。
みのりが口を開く
「お見舞いに来たんですよ」
今にも涙が零れそうなくらいの笑顔で言う。
愛おしいその存在が眩しくて、目を細めた。

3ページ目

胸の締め付けを止められずに、俺はただ話し続けた。
いつだってそうだった。
あいつは俺の話をニコニコしながら聞いていた。

そんな会話の中、まわりの人からバイクを辞めろと言われてると笑いながらポロリと溢した。
その話を聞いたみのりは悲しそうな顔をした。
「高井さんバイク辞めちゃうんですか？・・・辞めないでくださいよ」
事故に合って始めて言われた。
見舞いに来たすべての人に「もう乗るな」と言われたのに。
「そんなこと言うのはお前だけだよ」
と苦笑いをして返すと、
「事故は心配だけど、私たちを心配させないために高井さんの楽しみを奪うのは嫌ですもん…」

なんてコイツは真っ直ぐに想ってくれているのだろう。
自分は泣き出しそうな程に心配しているくせに、今の俺の唯一の楽しみを奪われたくないと訴えてくれていた。

「あぁ・・・また乗るよ。来年くらいにはな…」
と言っていた。
まわりに怒られてもいいと思えた。

するとみのりは「良かった」と言い、俺の大好きな笑顔を見せてくれた。
俺は時間を忘れて喋ってしまっていた。

ガチャ・・・

・・・・・。

来てしまった。

みのりをこれ以上傷付けたくはなかったのに。

みのりに嫁を会わせるなんて。

「あぁ・・・来たんだ。嫁と息子。この子はいつも話していたみのりだよ。」
そう、俺は嫁にみのりのことを話していた。
好きとかそんなことは言ったりはしていないけど、いい子が居ると話していた。

一瞬凍った表情を見せたみのりは、すぐに笑顔を見せて
「いつも高井さんにお世話になっております」
とそれはそれは痛そうな笑顔を見せた。

「こちらこそお世話になっております」

それからみのりは忙しく帰っていった。

見送ったその背中が、頼りなく空を仰いでいた。

俺は何度アイツを傷付ければいいんだろう。

一番の理解者であった筈なのに、俺という存在がアイツを苦しめている。

４ページ目

それから一週間後。
俺は無事退院して、自分の店・そしてバイト先に迷惑をかけたことを詫びに行った。
こういう時は、やっぱり嫁も一緒に着いてくるもの。
菓子折りを持ち、店に出向いた。

店に着くと、チーフが出てきて話をし始めた。
１０分・１５分。。。
一向にみのりはキッチンから出て来なかった。
その間ずっとチーフの小言を聞きながら、意識は違うところに飛んでいた。

３０分くらい経ったころ、作業中のみのりがホールにトタトタと出てきた。
賄いを作っている最中らしく、みんなの分の食器を取りに来ていた。
俺たちの方を一切見ずに、またキッチンへと足早に帰っていく。
傷つけている事実が辛いのに、俺は一週間ぶりに見るその姿が愛おしくてたまらない。
帰る前に一言でも言葉を交わしたくてキッチンに顔を出した。
「おぅ。」
と声をかけると、
「あっ・・・お疲れ様です。」
また下を向き作業をし始める。
顔色が悪いのが見て取れた。
だけど、おもてで嫁が待っている。
「じゃあな。頑張れよ。」

と言って、その場を後にした。

最低だな。

結局は俺は自分が大事なんだ。

それから俺はリハビリをしたり、自分の店の事務的作業を忙しくこなしていた。

やっと簡単な仕込みなどが出来るようになってきたころだった。

最後にみのりに会ってから一ヶ月経っていた。

みのりの移動先の店で働いているヤツに偶然会った時に、ポロッと聞いた。

「アイツ、みのりは元気でやってる？」

するとソイツはビックリした顔をした。

「高井さん知らないんすか？中里さん辞めたんすよ。ウチに移動してきたその日に」

頭が真っ白になった。

「はぁ？どういうことだよ！聞いてねぇし。」

一ヶ月も自分から連絡を取らなかったくせに、俺は怒りを抑えられなかった。

「大変だったんすから。出勤して仕込みとかやってたんですけど、主任が来た瞬間突然ボロボロ泣き出しちゃって・・・主任は詳しいこと教えてくれなかったですけど」

怒りから悔しさに変わった。

何故俺の前で泣かない？

今何処で何をしてるんだ？

悔しい。。。

俺はアイツの涙など見たことがない。
一番傷つけていたのに・・・
みのりはいつも俺の前では笑っていたから。。。

5ページ目

仕事の帰り。
みのりに連絡を取ろうと携帯を取り出した。
仕事終わりで皆と飲んでいる時に、少し酔っ払ったみのりに聞かれていた。
「高井しゃん。。携帯の番号教えてください」
だいぶ呂律が可笑しくなっていて可愛かったのを憶えている。

思い出してまた苦しくなって、今どうしているのか・・・

俺のことなど忘れただろうか・・・

それでも俺は勝手に消えたアイツが許せない。

「・・・もしもし。」
何コール目かで出た。
声だけでも戸惑っているのが受け取れる。
「もしもし？俺だけど。お前辞めたってどういうことだよ！」
抑えが利かない。
俺の存在をみのりに判らせたくて。
「いやぁ～…ちょっと病気になって。限界が来てしまいました…」
最後に会った時の、顔色が悪かったみのりを思い出す。
「お前なんで一番に俺に言わないわけ？」
俺はお前の一番の存在なんじゃないのか。

俺を忘れる気なのか・・・

「だって高井さん。事故で大変だったし・・・」
そうだった。
コイツは自分のことより人のことを考え過ぎる。

「あのなぁ～言ってくれてれば、俺が主任のところに行ってお前をくれって頼みに行ったのに。。
俺はお前ともっと一緒に仕事したかったんだよ！それをよ・・・黙って消えるなよ…」

本当に悔しい。

辞める時に俺に言ってくれていれば・・・
丁度俺の下で働いていたスタッフが辞めた時だった。
みのりをちゃんと自分の下で働かせることが出来たのに。
「私も、もっと高井さんと仕事したかったです」
電話越しでも分かる。
本心で言ってくれていることが…
遅かった。。
すべてが遅すぎて、時間を戻すことが出来たなら・・・
俺はアイツの隣に居続けることが出来るのに。。。

こうなることが正しかったのか？
そう仕向けたのは神様って奴か？
さぞかし面白がってるんだろうな。。。

こんなオッサンが１５も下の娘に恋焦がれてる姿を．．．

6ページ目

俺はまた現実を生きていかなくてはならない。
しっかりと金を稼ぎ、家族を養い、休日には家族サービスを・・・
以前みのりにもこんな話をしたな。。。
だからかな、アイツが頑なにバイクはやめないで欲しいと言ってきたのは。

今頃アイツは元気にやってるのだろうか・・・

彼氏出来たかもな・・・

最近店に入ったお気に入りのホールの女の子、そういえば笑顔が少しアイツに似てる。
それでもやっぱりみのりには敵わない。
気取ってない、あのクシャっと笑う人懐っこい笑顔。
見てるこっちも笑ってしまう程だった。
会いてぇな・・・

これから時が過ぎるままに生きて行くのだろうか。
時間なんて残酷なもんだ。
最後に言葉を交わして6ヶ月。
案外平穏に過ぎてきた。
暮れの忘年会でお気に入りの子が隣に座って、なんか無性に淋しくて・虚しくなって、バカみたいに飲んだくれて倒れた以外は…
俺の隣にアイツが座ることは無いという事実が突きつけられた気がした。

もう冬も終わり始める。

俺ももうすぐ歳を重ねる。

そんな時だ。

みのりから突然電話を貰った。

「もしもし？ミノリかぁ～どした？」

平然を装って、出来るだけ明るめに出た。

「お久しぶりです。あのですね・・・今のバイト先で社員になることが決まって、高井さんにはちゃんと報告したくて。。」

緊張しているのか、少し声が畏まっていた。

そして、小さな期待を打ち砕かれた気がした。

半年間、いつかアイツが俺のところに戻ってくるんじゃないかと期待していたのだ。

この電話も、「やっぱり高井さんと一緒に仕事したいです」なんて言ってくれるんじゃないかと思っていた。

「そっかぁ…おめでとぉ。じゃあ今度飲みにでも行くか」

このまま切ってしまいたくなかった。

また連絡がくるなんて確証はない。

俺とアイツの間に、小さな約束を・・・

もう一度だけでいいからあの笑顔を見せてくれないだろうか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5824c/

お前だけ

2010年10月15日19時01分発行